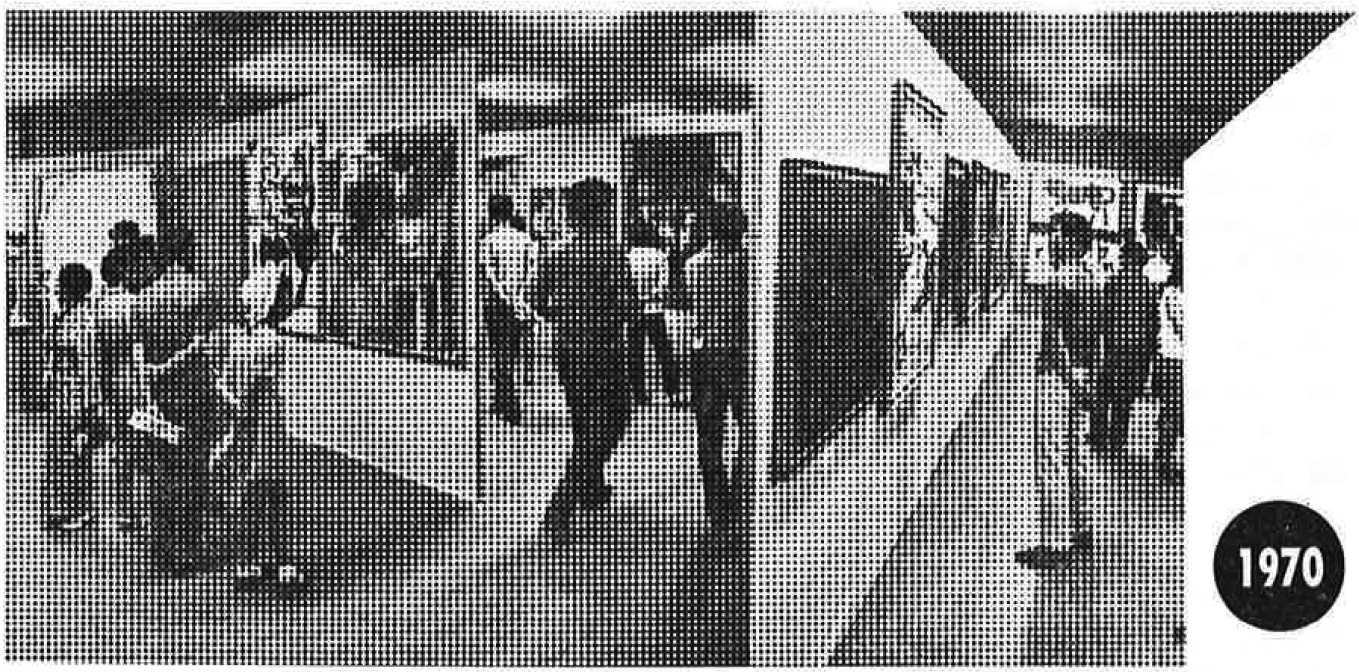

1970

●座 談 会

『全道展と私』

出席者　会 員　坂口　清一，竹内　豊，後藤　庸也，渡会　純价
会 友　長谷川忠男，米谷　哲夫，山口惣市
司 会　会 員　久守昭義

●全道展の魅力は芸術の厳しさと強烈な個性の供宴

久守　今日は全道展に参加している作家の皆さんに，全道展の内側から見た自分の意見を率直に語ってもらいたいのですが，まず，全道展の魅力からお願いします。

竹内　昔から全道展は入選がむずかしかったし，絵かきそのものだった。友誼団体ではなかったですよ。

山口　単なる絵を描くだけの寄合所帯でない厳しさがあったと思う。

長谷川　僕はわりと早く６回展あたりから出品していたが，何か土臭さがなく，道内の展覧会というより幅広い全国的な明るさの前向きな姿勢が常に流れている会であったと思う。これが一番の魅力で，同時に自分と

いう人間が全道展で育っているということです。

久守　たえず自分を開拓してゆく，その厳しさと流れ動いてゆく会だということですね。

米谷　私が絵を始めたのは26歳ごろで遅い方だったが全道展は実にむずかしかった。全道展に出品することは，男らしい絵描き根性として一生の仕事をするに値する会だということでした。

竹内　それに温情主義とか縁故関係に作用されることのない会，作品のみが勝負だという厳しさなのです。

後藤　率直にいって，全道展は強烈な個性の供宴の場だと思う。これが何よりの魅力です。そして，たえず現在の自己をつぶしながら前進する自己主張を持ち，決して沈滞せずにアンド・ステップしてゆく。しっかりした主張のない作品は落される。全道展は落されるところだから魅力につながり，作家が育つと思う。

久守　厳しさの励ましですね。坂口さんは，そういった意味で，岩内に居たころから頑張っていたのですから相当の魅力を感じていたと思いますが，どうでしょう。

坂口　ええ，やはりその厳しさが魅力であり，特によいと思ったことは，どんな好き勝手な仕事の内容であっても，バイタリティーのある作品は少々まずくっても認めてもらえるということでした。地方に居ると具象作品しか見られないし，一部の人間は，これに飽きたらず別の世界を求めていたのです。全道展では抽象作品を経て具象に戻った人もあるという探究の姿勢ですね。その魅力ですよ抽象も偶然でないしっかりした必然性のある抽象画が多いことです。もう一つの魅力は，出品常連者であっても落されるということです。その人たちの根性は，全道展で落されても幸せだ。はいるまで頑張ろうということなのです。こうした意気込みを与えていることです。受賞する作品のよさはその辺にあると思いますね。

竹内　そうですよ。創立会員であっても，皆それ相応に動いてきたのですから。

●新鮮で流動性を持った自己探究をする作家集団

山口　ひとりひとりの作家が会をここまで持ってきたこと，つまり，単に自分の足が北海道にくっついているというだけの視野の狭さで仕事をしていれば，竹内さんのいったような温情主義があったと思われるが，この会を盛り立てた会員たちが，世代を越え常に新鮮であり，流動性を持って探究していたことです。その眼で展覧会をする時に作品を一点一点見てゆくのは至難の技だろうけども厳しさが要求されるのは当然でしょう。厳しいということは，両者にとって，そのことが励ましになっていると思うのです。同時に，そうした皆さんが，この門をくぐってきたのだし，そこにぶつかってゆくものを僕たちは持ち合せているし，また全道展出品者が皆持っていると思う。この姿勢がなくなるとすれば，どこかで権威主義が横行し，慣れ合いが生れるでしょう。全道展は年齢の差は作品にはないし階級制もなくて絶えず絵画とは，彫刻とは何だろうということを見つめる眼を持ち合せていることが最大の魅力ですよ。

坂口　それに，あの作品と一緒に自分の作品を並べてみたい，もう少し前進すると，あの作品と喧嘩をしてみたい気持になる魅力もあります。それがないと団体展の魅力と意味が薄れることもあるでしょう。

久守　版画の場合でも，やはり同じことがいえるわけでしょうね。

渡会　前に油絵をやっていて版画に転向しましたが，団体としての展覧会より個人としての作家メンバーに魅力を感じてます。顔も知らない単なる作品ですが通じあえる，ということは，あくまでも自分の作家姿勢を持つのだということで作品がすべてである。そして自分も同じ壁面を獲得したいと感じるようになる魅力ですよね。

竹内　質が高いということ。これは結局，自分と闘っているということでもあり，個々の作家の真剣さなのです。

渡会　全道展の中で結局は作家が育てばよいことなのだと思う。公募団体の中には造反やらが起っているが，個々の作家が育たねば何にもならないし，全道展の体制だけを大切にするだけでは発展はないでしょう。自分の姿勢を中心に全道展の本来の姿になってゆく，そんな形のものに生れ育つ気持を持ちたいと思ってます。

坂口　それに加えていいたいことは，毎回の全道展で毎回同じ作家に注目して見ていると，現段階を乗り越え，破壊しながら自己の芸術を創り変えてゆく姿勢が多く見られますね。これは，特に他の団体より顕著な

こととして最高の魅力と思います。

竹内　そうなんですよ。自分に一定のスタイル的な枠をはめてしまって，評判がよければ，これで通しっぱなしで定着するということでは全くない。個々の作家が幾ら年をとっても，新陳代謝しようとする気持があれば，幾らでも自己を磨き尽すということはないでしょうね，要するに，作家は絶えず子供や画学生と同じ新鮮さを絶やさぬことが大切だということです。

後藤　我々は権威に対しての抵抗を持っていると感じるのだが，全道展は権威主義はないし，なくすることが許される会だと私は思ってます。作品で発言し勝負し，すべてに先行し代弁させてくれるこの純粋さが絶対の魅力になっています。

久守　それは一般の出品者がいうのではなく，会員の方からいってるのですから，当然，一般出品者には魅力になるだろうと思いますね。

渡会　こうした種々の主張や，その魅力をどこまでも曲げないでゆく努力ですね。

●中央，地方にこだわらぬ幅広い全道展の位置でありたい

山口　先ほど全道展で自分を成長させるために厳しさを求め，そこに育ったといいましたが，その場合にこれだけにこびりついていてよいのかということ，結論からいえば，こうしたものは今後なくなってもよいと思うのか。または自分だけが育てば，それでよいとするのなら別だが，そこで美術文化を育てる方の精神はどうなるのか，私はいると思うのです。全道展は教育団体ではないが，美術文化を普及し，進めるという創設当時の目的が，流動する世の中でも存続させる精神がいるのでないかと思う。数多くの人たちから全道展はこうであったという遺産としての価値を今や70年代にとって必要であるかどうかその価値を問うべき段階だと感じています。そういうことの前にも，中央と地方の問題があるとは思いますがね。

久守　これは大きな問題になりましたね。自分が育つことと，他を育てることの兼ね合いがどう解釈されるか，ということになるようですね。

竹内　いやそれは，作家精神を植えつけて今までやってきて育てたのではないですか。それに飽き足りないのなら出ていってもよいのだし，そこにいても決してマイナスにはならないのでしょう。要は教えることが別にあるのでないことだ。

渡会　ですから，やはり一人の作家として育つことは次々と枝葉がはえて広まってゆく提供の場が全道展なのでしょう。作家が伸びていけば皆がついてくるし，我々も引っぱってゆく，それが美術文化の土台として貢献しているといえるのではないですか。

後藤　すぐ文化の向上につなげるのでなく，作家の姿勢が結果として貢献することなのだと考えますが。

久守　今年は25周年記念として移動展を道内各地でやることになっていますが，これとの関連からいえば特にこの問題は意味深いものになると思いますね。

長谷川　僕は移動展，地方文化とかを振り回して考えるのではなく，全道展の作品とその姿勢を全道的に見てもらうことにあると思いますね。

坂口　僕も結果的に，そうなってゆくことを考えてますね。

長谷川　それと，もう一っ考えられることは，一人前になるとすぐ中央に飛び立ってゆくということは困る。飛び立ってゆく人たちの気持は，あまり素直でないと思うし，よけいな気持でないだろうか。それと個展と公募展両方あってしかるべきだと考えてますが個展は自分の場だし，公募展は競いの場でしょう。例えば林武の絵と誰かの絵と並んでも，林武にないよさのある作品もある。林武であっても，初入選の後輩の人からでもよいものを吸収し，また出来るはずであり，その意味での闘争の場として地方を離れて飛び去ってもらいたくないのです。こちらも吸収したいから。その意味で全道展の場はよいと思う。

後藤　その闘争の場ということですが，全道展では会員としての相対評価がありますよ。これはビリビリとした激しいものがあって，すごみになっています。皆の絵と並べられて評価される。これがよいのです。それしかないといってもよいてすよ。

米谷　ちょっと変なことかもしれませんが，地方展の考え方として，なぜ東京で地方展をしないのかということ，北海道が主体のだとすれば東京は地方になるはずですし，しかも美術のメッカは，こちらにあるかもしれないですしね……。日本における全道展であるという自負を持ち，その視点に立つならば，もっと羽ばたくゆき方を考えねば70年代には話にもならないと思います。我々は歴史性を考えたり，破壊や建設をしながら中庸を取って進めねばならない。このような中央と地方のとらえ方もあるとい

うことですが……。

渡会　直続するという中央・地方の気持は，もっともっとあってしかるべきですよ。今回の地方展の準備でも，これが問題になっていましたね。

後藤　いやしかし，米谷さんの意見は，まだ東京を地方と考えること自体に，中央に対するコンプレックスが前提になっているからなのではないだろうか。やはり東京はすごいし，大変なのだと思う。

●風土感を通して自己の源点を探ることか無意識ににじみ出されるものか。

久守　地方に主体性があると見なせば，その地の風土性が問題になりますが，どうでしょうか。

後藤　私は北方に育ったことが潜在意識の中に風土性がはいっています。これで自己を探ってゆく，それは自分に持ったものは風土性につながるのではないかと思うのです。それが自分の価値を探る源点ではないだろうか。感覚的なものとの結びつきの抑え方として認識し，結晶させるものがあり，また持って生れ育った感性があるので，近代感覚の接点との対決があるはずです。

竹内　それは評論的ないい方であって，そのように自覚されるべきものが風土性じゃない。自分の絵の前に立って，そのような枠をはめる必要はないのであり，これはおのずと表出されてくるものでしょう。意識すると，かえって負担となりますよ。

坂口　やはり，風土性や郷土を故意に意識すること自体おかしいでしょうね。

竹内　いいたいことは結局のところ，風土性の良し悪しでなく，そうしたもので自己を規制せずに，自分の枠をはずして広くゆこうということを僕はいったのです。

久守　風土の問題のまとめとして，山口さんはどうでしょうか。

山口　冷静に風土性を考えると，何もこれについて普通の人にはこんなことを問われないでしょう。ものを創造してゆく側の場合に，自分の生れた自然現象を単なる現象と見ずに，その現象と自分とのかかわり合いを厳しく自分に問いつめながら，その土壌から仕事を進めようとする傾向はありました。木田金次郎などは風土性をかなり強く意識した作家の例であり，同じ北海道で育った三岸好太郎は何ら風土をかかわり合いにしたとは思えないし，特別，関係がなかったということです。だか，ら風土性というのはものを創る側からいえば，すみやかに風土性から解放されるべきだと思います。

後藤　でもやはり，作家には各々個性があるので，探ることもあってよいでしょう。

竹内　探ることより，ぶっつけることでしょうね……。

長谷川　各々の立場によって異なるのですし，また各人の生い立ちにもあるでしょう。

久守　結局これは，にじみ出てくるだけのものでよいのではないのですか。

●作品を制作して生きる以外にない生活者

久守　作家活動を続けるという意味で，常に皆さんが考えている事があると思いますが，作家活動その事について話を進めてゆきたいと思います。

竹内　私は作家活動とは，本当に絵が好きでなければ，出来ないと思いますね。まあ恋愛みたいなものですね。何んというか……欲求でしょうね。

長谷川　僕の場合はちょっと違うんですが，僕の生い立ちはすごく厳しい家庭に育ったせいか，そういうものに対するものすごい反発を現在持っているんです。そういう生活は二度としたくない。したがって絵には苦しみとか悲しみとか，いうものを絶対に描きたくないんです。現在の生活よりも，もっとすばらしいものを，恋愛なんていうものではないんですが，それよりもっとすばらしいものを…だから浜辺を描いたり，魚を描いたり今ゴーゴーを踊っているのを描いています。何か夢の世界を追っているようなものを描いています。いろいろな作品を描いていますが……なんでもよいと思うんです。これまで一年間の自分の勉強の後ということで抽象的なものもあるし，赤いものもあるし青いものもあるんです。そういうことで，これからの全道展の場合，いわゆる平出品の立場でいえば，発表として取る場合には確かに主張があって，こういうことを発表したいんだということで三点，五点とある時確かにきれいに見えるが，僕はそういうことではなく，その人の歩んできた本来の切実なものを見てほしい。また生活そのものが，僕の絵と人間が違うということは当然だと思います。

山口　僕はね「貴方はどうして絵を描くんですか」などと問われた時，それに対して「はい，これこれしかじか」という理由は，自分ではまったくわからない。その気持の底に何があるのかといえば，そうですね……理由なく生れてくるんだ。それは衝動ではないのだろうか。それより自分に何にも理由を問い正さなくとも描きたくなるものが続くということ，そこが自分のなぞみたいなものだ。「どうしてですか」といわれても，描かずにはいられないんです。

後藤　僕はね，自分を破滅したいね。破滅型人間にしたい。それが絵に結びつくんだ。自己中心的に生きたいと思います。僕は破滅型人間になった時，よい絵が描けるかしもれない。

坂口　私は絵を描くということは宗教または信仰みたいなものですね。つまり宗教というのは変ですが，自分に信じられることは絵を描くこと以外に何もないということ，そんな気持です。その中では自己破壊だの，或いは権力への抵抗だとかいうものを絵にぶつけながら制作してゆきたい。

竹内　僕はね，そういうものの考え方は60年代の考えでは存在するでしょうが，これから70年代の人間はそういう風な考え方で絵を生活に結びつけてはゆまないのではないかと思うんだ。敢えて作家も幸福で絵も描いてゆけるということで両立することも可能かもしれないと思います。

渡会　僕は自分の作品を創るうえで，常に筆やペンを持つことであり自分の腕で勝負することですね。あまりに人のものを聞いたり読んだりすることは，かえって自分を失ってしまうこともあると思う。それではいけないと思うんです。

山口　これからまた，新しいルネッサンスがくると思うんだ。いろいろな面で絵描きは絵だけ描いていればよいという，つまり外界のものを遮断して，ひたむきに絵を描いていればよいという，そのほかは一切何も知らなくともいいんだ……と，そんなことが許された時代であったが，しかし70年代ではそうもいかないでしょうね。それをこれからの作家が考える時，非常な厳しさを感じる。私はきっと言葉で表現したり，相手と語らったりすることだけでは何か空しく不満を感じる。だから自分を広く共通の広場で訴えたり，それに対する共鳴やら反感を求める気持を，やっぱり絵を中心に考える生活者である，そういうものが絵描きにあるのだと思う。

米谷　我々の場合，生活を考えたり，我々の地位の向上を考えたりしては決して絵はよくならないと思う。ものすごくじり貧であり，最低の生活をしながら描いたものにこそ，よいものが出来ると思う。

久守　創作活動を考え，ぎりぎりの線まで追い込まれた時，やはり何か出てくるものがあるのではないだろうか。安易な生活の中では出てくるものも出ないで終ってしまうような感じがします。

竹内　それは美談ではないのだろうか……。

山口　生活の向上とか，そんなこととは別に，生きるということは違うのだと思う。僕はきっと絵の中に思いきり生きたのだということなのだろう。それが坂口さんのいう”信仰,,という言葉の出てくるいわれなのでしょう。

久守　まあ，いろいろと全道展や我々としての問題は山積していますし，なかなかまとめまでは行きませんが，それだけ発展の可能性もあるということで，この会を閉じたいと思います。

（1970年5月16日，札幌かど屋にて。）